アメリカン・ボード宣教師文書

―同志社女学校女性宣教師を中心として―

〈スタークウェザー書簡―訳および註―〉（２）

日　比　惠　子　監訳
杉　野　マリ子
小　林　弘　美
紀　和　敬　子

Starkweather 書簡翻訳続き

〈241〉【杉野マリ子 訳】

日本の京都にて、1878年２月16日、クラーク博士宛

拝啓

日本に赴任しておよそ２年になりますが、これまで何通もご親切なお便りをいただき、心から感謝しています。毎回喜んで拝読しております。遠く離れたあなた様には、こちらがお便りでどんなに励まされてきたことか、ご想像もできないことでしょう。直接にはご覧になれない計画に、そのように賢明に関わられるのは、きっと上よりの特別な導きがあるからこそ可能なのでしょう。最近忙しい月が続き、お便りしたかったのですが叶いませんでした。デイヴィス先生の有能なペンで、京都の働き、特に私たちの愛する女学校の情報があなた様に伝えられたと知って、自分で書くより100倍も満足を覚えています。デイヴィス先生の経験や先見の明のある判断力によって、あらゆることが、公平かつ明確に伝えられてきたのですから。

こうした手紙の大切な箇所は、私たちのテーブルのまわりで読み上げて確

認し、皆で祈ってアーメンと言ってからお送りしていますが、その時の安堵感はお分かりにならないでしょう。これから福音を伝達しようとする人々の言語や趣向について学ぶことも大切ですが、よく訓練され経験豊かな現地の人たちの下に謙虚に素直に座して、初心者として学ぶことが必要ですし、また賢明なことだと、ますます感じています。

私たちが遣わされているのは、根気よく礼儀正しく我慢強い人々のところであってよかったと、つくづく思います。このような人々に、私たちの西洋的なマナーが、ひどく無礼で実に不快なものになっていないかと、しばしば懸念します。言うまでもなく私は、神様が私の心に日本宣教の想いを最初に注いで下さった時から、日本人を愛しています。この日本への関心は、シカゴ近郊在住の、グリーン牧師[1]の友人のお宅で、最初の日本人知人となった澤山さん[2]にお会いした時に一層深まりました。この澤山さんが、当時心に抱いた熱烈な希望を、その後帰国してほぼ実現され、自国民のために、忠実に成功裏に働いてこられたことを、私はこの目で見ることができました。

ますます満足感が募っていくのは、この古い日本の中心であるここ京都で、小さいながらもこうしたすばらしいクリスチャンの群れが既に育っていること、また伝道者養成学校では、同じ志を持つ仲間（我らの同志社）が、いよいよ外に出かけて行って、この国を祝福する準備をしていることです。しかも、これまでにアメリカに渡った人たちが苦労した不便さや多額の出費をこうむらずに、です。入洛するや英語で挨拶をしてくれるクリスチャンの交わりがあるなど思ってもいませんでしたし、その様な親交を結ぶには、数年はかかると思い込んでいました。このことは、内面に起こった大いなる業の明確で強力な証であり、外からもたらされた神の恵みをすぐさま理解するという証しでもあります。

愛する女生徒たちについては、単なる生意気で未経験な情熱の「ほとばしり」と思われてはいけないので、今までお伝えするのを控えてきたのですが、今は安心して言えます。女生徒たちは、あらゆる点で大きな期待をかけられ

るに値することを身をもって示してきましたし、喜んで熱心に真理を学んでいます。そして穏やかで気持ちのいい生活の中で、信仰の果実が生まれています。

私たちは母国のクリスチャンになったばかりの人を見るよりもっと注意して、この新しくクリスチャンになった人たちの外面的ふるまいを観察していかなければなりません。クリスチャンになって皆は、今まで礼儀正しかったのは「ただ口先だけだった」と言っていますが、改宗した心の内面の顕れ、つまり生徒たちの作法はいつも非常に親切で、見た目にも完璧だからです。

私たちは毎日、ラーネッド教授の監督下で建築中の建物の進み具合を見に行っています。先生はいつも疲れ知らずで働いて下さっています。一週間前の今日、日本人の慣習で棟上式をしました。このような祝い事には、大いに迷信的要素が混じっています。しかし、日本人があのような巨木をあのような高さまで持ち上げる力を与えてくれる神や、家の将来の安全を願って捧げ物をする神を必要としたからといって、何かの神を探し求めてしまう暗い異教的精神を責めることはできませんでした。次回、完成した校舎の写真をお送りできればと思っております。

ご存知のように、この建物はあらゆる点でほとんどが日本式になるはずです。その方がずっと良いと思いますし、費用も西洋式と比べものにならないほどです。西洋式塗料は一切使用されず、素朴な日本式塗料だけが使用されていますが、それだけでもきっとかなり倹約になるでしょう。造りは神戸ホーム[3]のものと似て、一階と二階の正面の両端には、外国人用の部屋がありますが、その中の一室は客間にする予定です。神戸ホームの女性宣教師たちも、近いうちに初めて客間がもてるようで、嬉しく思います。仕事中に始終人の出入りがあるような部屋しかない状態では、どんなに熱意のある人でもどれ位我慢が続くか予想は難しいですが、ほとんどの人はそれだけですぐに精神的に参るでしょう。

二階の残りの部屋は、50名の生徒を収容出来るように配置され、日常的に

必要な食堂や教室は一階にあります。広間は、時にはふすまを取り外して、説教や諸々の会合のための広い集会場に変えられます。トルコに行かれたように、日本旅行も計画して下さることを心から願っております。是非お来し下さって、ご自分の目でご覧下さい。どんなに励まされることでしょう！

お写真を指して、今ちょうど傍にいる生徒たちに、手紙の宛先があなた様であること、あなた様が皆のためにして下さったことなどを話しています。生徒たちは心から感謝の念をお伝えしたいと願っています。是非お会いして、この学校の祝福を祈って下さるようにお願いしたいと申しております。

デイヴィス先生の荷物を新居に運んでいる人たちの声が通りで聞こえますが、先生のお宅で約２年間お世話になった楽しい交わりも、後２～３日で断たれてしまうと思うと、感慨深くなります。新しい校舎が完成するまでは、この家を借用できることを願っています。でもご存知のように、御所内の全ての家は、大きな公園を作るために取り壊される予定なので、住まわせていただけるかどうかは分かりません。デイヴィス先生一家が去ってしまわれると、どんなに淋しくなるでしょう。来日して最初に共同生活をし、毎日のように新しい経験や喜びを共に味わったご家族ですから。

昨秋こちらに遣わせてくださった新しい女性宣教師たち[4]を迎え、共に住み共に働くことが出来るとは何という喜びでしょう。私のように待ちわびた人でないと、この二重の喜びが理解できないでしょう。さらに４人の女性宣教師たちがこの尊い働きに従事したいと望んでいると書き送って下さったとき、京都に是非全員来て貰いたいと思う気持ちを抑えきれない程でした。

先週、病気の幼いジョン・マール君[5]のお世話で忙しいデイヴィス夫人の代りに、夫人がなさっている女性集会を担当させていただいたのですが、そのとき私の周りに集われた多くの女性たちのお顔を拝見しながら（前回くださった素敵なお便りを受け取った直後でしたが)、実り豊かな収穫の時が正に私たちの手にあることを改めて心に刻みました。きっと神様はこのような地に働き人を望んでおられるでしょう。私たちのためにもっと熱心に祈って

下さるように皆様にお伝え下さい。私たちはあらゆる才能を必要としていますし、あらゆる分野の教養や技能を日々必要としていますが、母国でかつて聖霊の力を、と叫んだ以上に、ここではなおさら必要なのです。もっと砕かれ空しくされて、主のご用のために相応しい器とされていきますように。ご存知のように、デイヴィス先生の先見の明によって、女性たちのために学校が計画され確保されましたが、真にタイミングよく時宜にかなうものなのです。

説教の場所としてこのような素晴らしい場所に導かれたのは、はっきりと主の摂理のように思えます。２つの学校は御所の北側に、そしてデイヴィス邸は御所の西側、新島邸は御所の南東にあります。引っ越すまでは、この家で今までと同じように礼拝を持ちたいと願っています。

先週の日曜日の午前中に、町の中心にある礼拝所で、私たちに送ってくださったポータブル・オルガンのお披露目を喜びのうちにさせていただきました。そのことを私たちがどれほど感謝しているか、そのオルガンがどんなに人々を引きつけたかご想像ください。この場所を確保するのも相当困難であったことはお聞き及びでしょう。教会［西京第三公会］の皆さんが、目下仮牧師として働いている先生（私の日本語の信頼できる先生［本間重慶］）のご指導の下、ここを手に入れるために非常に忍耐強く、長い間努力してこられました。その牧師の許婚は、４月以来ここで勉強し、真理を熱心に吸収してきました。今後は、この人がここでオルガンを弾いてくれますようにと願っています。模範的な成長をとげている人ですから。

最近、２軒隣から師範学校[6]の先生の１人が、翻訳して、どの学校でも教えられるような道徳の本はないだろうかと尋ねて来られました。これがまさに喜びの出来事となるような特別な状況がありました。幸いにもデイヴィス先生がおあつらえ向きの本を持っておられたのです。

２月22日：デイヴィス先生一家が行ってしまわれたので、私たちはその新しい状態に馴染むのに精一杯です。足元の地面は今にも崩れそうで、現に私

たちの周りはどこも古い壁がどんどん取り壊されていきますが、私たちだけでしっかりと家事の切り盛りをしています。お隣の家は、ちょうど取り壊されている最中で、多くの巨木や潅木も次々取り除かれていきます。

京都ホームの働きは急速に進歩しています。もっともっと私たちのために祈ってください。そこに私たちの力の源があるのですから。

次のお便りでどんな良い知らせが届くかしらと楽しみです。ウィルソンとパーミリーからも、どうぞ皆様によろしくとのことです。

敬具

アリス・Ｊ・スタークウェザー

追伸：デイヴィス先生一家は、新しい家にほぼ落ち着かれました。多くの方が引っ越し祝いに訪れたとの報告があり、次の日曜日には早速説教をしたいと望んでおられます。今後の祝福に大いなる希望となるものです。

Ａ．Ｊ．Ｓ．

1　Daniel Crosby Greene（1843-1913）1869年、アンドーヴァー神学校を卒業後、アメリカン・ボード最初の宣教師として来日。神戸に赴任。聖書翻訳委員となって横浜に移り、新約聖書の翻訳に従事。完成後、1881年に同志社英学校教授となり、神学、旧約聖書、英文学を講じた。

2　澤山保羅（1852-1887）牧師。1870年ごろ神戸に出て、グリーン宅で英語を学び、家庭礼拝にも出席。1872年米国に留学。イリノイ州のノース・ウェスタン大学予科に学ぶ。同年11月、エヴァンストン第一組合教会で受洗。1876年帰国、大阪で伝道に従事。1878年、梅花女学校を自給で開校した。

3　1873年にアメリカン・ボードから日本に派遣された最初の女性宣教師タルカット（Eliza Talcott, 1836-1911）とダッドレー（Julia Elizabeth Dudley, 1840-1906）が、日本女性への伝道と教育のため、神戸花隈村に私塾「神戸ホーム」を開校。1875年10月12日、寄宿学校が落成、タルカットが校長に就任。1879年、神戸英和女学校と改称。現在の神戸女学院の前身。

4　同志社女学校に赴任するために、1877年10月に来日した女性宣教師、Harriet Frances Parmelee（1852-1933）と Julia Wilson（1845-?）を指す。二人の京都在住許可申請は新島によって２度にわたって提出されたが、1878年７月になっても受理されず、二人は仮許可証で京都ホームに滞在、夏は神戸で過ごした。パー

ミリーに京都在住の許可証が下りたのは３年後の1880年、ウィルソンは1879年に新設の岡山ステーションに移った。

5　John Merle Davis（1875-1960）J. D. デイヴィス夫妻の長男。1878年２月22日付で新島が京都府知事に届けたデイヴィス一家の転居（２月20日）届には、“男子ジェー　モルル　デビス　２年４ヶ月”とある。

6　1876年６月２日、御苑内北で、京都府師範学校が、教師８名・生徒67名で開校した。

〈242〉【日比惠子 訳】

日本の京都にて、1878年３月16日、クラーク博士宛

拝啓

「京都ホームの女性宣教師たち」に宛てられた、１月19日付のご親切なお手紙は滞りなく届きました。私たちの個人的な幸福と当地の仕事の順調な成り行きに対し、はっきりと興味を示してくださり、ご提案かつ親切なご配慮を頂き心から感謝いたします。

同封の写真は、「驚くべき情報」が日本から発信された頃の私たちの学校です。これを見ていただければ、今以上に、学校の状況についての正確な情報をつかんでいただけるでしょう。ただ、左側の皆より幼い２人の少女は、その時はまだ学校の生徒ではなかったのですが。これから、私たちの生徒５～６人を紹介させていただきます。きっと、その生徒たちについて、もっと詳しくお知りになりたいと思われるはずですが、その前に私に関しての釈明をさせてください。お手紙に書かれた「ミス・スタークウェザーはすでに労働に疲れ果て、衰弱している」―「宣教師は神の大義のために喜んで壮烈な死を遂げ、むしろ犠牲を払っていることに誇りを持つものだということは十分に存じている」とのもう１つの間違った印象、それは誤解ですと申し上げたいのです。

本国の知り合いの中に、「あまり元気ではないのです。本当にそれほど元気ではないのです！」という、若い女性の間で流行っている返事にうんざり

して、「私は体重が160ポンド［約72キロ］あります。今までこんなに元気だったことはありません」と宣言することに喜びを見出していた女性がいます。

私を送り出してくださった親切な女性たちのおかげもあり、自分の健康に気をつけることを第一にしてきました。そして２年が終わろうとしている今、嬉しくもこの気候にすっかり慣れています。他の方々がどのようにお感じになられようとも、私はまだ死ぬつもりはありません。死ぬことが神のご意志だと、人知を超えた摂理が示すのでない限りは。

来日以来、神様は活気にあふれた健康的なクリスチャンに満足し喜んでおられるという確信がますます強くなってきました。教育を受けた知識人が健康についての簡単なきまりを日常的に破るということが、神の前でいかに大きな罪となるか、考えるだけでもぞっとします。

いいえ！ご親切な博士、「心身衰弱」や「故国への送還」ということが極めて当たり前のことになってきていますが、160ポンドの体重を自慢することはなくても、本当に「今までの中でこれほど元気だったことはありません！」と心から言えます。私は日本で長く生活するために来たのであって、死ぬために来たのではないと思っています。神様は、私の毎日の生活や仕事の他に、次のような習慣に楽しく従っている私を祝福してくださいます。

健康によい食べ物―こちらでは穀物や果実は簡単に手に入り、日常的に食されます。故国の身も心も引き締まる冬は望めない日本の気候では、自分たちが住んでいる土地に多少なりとも適応するつもりでないと過ごせないでしょう。良い空気―この土地では、風通しの悪い外国の家屋は決して神の恵みにはなりません。毎日規則的に戸外で運動し、規則的に睡眠時間をとり、２日分の仕事を１日で片づけるようなことをしないこと。このようなことを心がけてきたから元気なのです。

学校の話に戻ります。京都の仕事に従事するということが、京都在住を政府に認めてもらえる唯一の根拠ですから、私たちの学校を「休校」にすると、私たち３人の女性宣教師を京都から追い出すことになるのだということは忘

れていただきたくありません。

これはあなた様には遺憾に思われる問題の筈ですが、あなた様への情報提供者にとっては、そうではないのでしょう。その信仰や人格ゆえに私たちが称賛してきた教養ある男性宣教師が、異教の女性の啓蒙に関して、数年後にはきっと自らを恥じ入らせるに違いないような狭い考えにとらわれていることは残念です。しかし、女学校には新しい校舎があり、あらゆることが着実に発展しつつあること、そしてお手元の写真の女生徒たちの顔をご覧になれば、言葉を重ねる必要はないでしょう。京都の女学校はすでに存在し、ニュー・イングランドの姉妹たちの小部屋での祈りの中でそれを造り出した全能の慈悲深い神以外のどんな力も、それを止めることはできないのです。

学校が特に異教の土壌にどのように植えつけられるべきかということや、魔法の杖で瞬時に生み出されるものでもないということはお分かりいただけると思います。もっとも理論家にはこのことは理解しがたいのかもしれませんが。

５人のグループをご覧になっていただくだけでも、多くの愛らしいクリスチャンの女生徒たちが、今は神様のために生き生きと仕事をしていることがおわかりになるでしょう。

５番[1]は、神戸での最初のころ、種まきの時期に収穫されました。そして喜んで京都へ移り、クリスチャンとして育てられる場所を見出し、正しくデイヴィス先生の新しい家で始められた日曜学校で大いに役立っています。

その横の３番［本間春］は、この中心地に迎えられなかったら、100マイル離れた暗い家で、牧師という生涯の仕事の準備をしている立派なクリスチャン学生の妻になるのを待っていたことでしょう。今は、真の献身の心でもって主のもとへ行くことができる人です。そして多くの人々が集まっている町の中心地にある伝道所で皆のためにオルガンを弾くことができます。その信仰は見ていても非常に立派です。この人ぐらいに上手にオルガンを弾き、讃美歌を歌えるようになるには時間が必要です。しかし異教の女性たちに対す

る可能性へのこれほどの証し人は10回の、いえ100回の説教ほどの価値があります。

２番[2]は、名前はよくご存知の、目の不自由な京都府顧問、山本さんの娘であり、新島夫人の姪にあたる人です。

１番［横井宮］は私たちの英学校の優秀なクリスチャン学生の妹です。熊本のキャプテン・ジェーンズの学校で兄とともに教育を受けました。わずか14歳ですが、幾何学と化学がよくできる生徒で英語を上手に話します。そして最近、新島氏の家に設立された教会[3]に加わりました。

別の写真の３番[4]は、髪型でおわかりでしょうか、22歳の若い既婚女性です。この生徒は夫（英学校に入学）とともに、エディンバラから派遣されたミッションのパーム博士[5]の庇護のもと、400マイル離れた新潟から来ています。この夫婦の目的は、京都に３年滞在し英語と音楽を学ぶことでした。クリスチャンとして大いに助けてくれましたが、収穫は非常に多いのに働き手がほとんどいないという知らせがあり、今年は新潟に戻らねばなりません。

私たちがしたように学校を始めなかったら、この仕事は少なくとも５年は遅れたに違いありません。この間に、この数の女生徒がいるということだけでも、英学校の生徒たちを育成する際に、同志社での今後のより高邁な人生観に計り知れない影響力を及ぼすのです。

お分かりいただけないでしょうか。「適当な設備が与えられるまでしばらく」解散するものなら、教えるという考えを全く捨ててしまうことになるのです。なぜなら、同じ人たちに「校舎など要らないだろう。生徒がいないではないか！」と言われるに決まっていますから。

このように「時代遅れ」のことを書くのは、無為に時間を過ごすことになると思います。主の仕事は、ここ京都では、絶えず前に前にと進んでいます。しかし何らかの情報が将来のために得られたらと思います。そして、何か特別な理由があるのか、日本人女性の解放を全く好意的に見ようとしない無責任な人たちが、自身が書こうとしていることをしっかりと調べる時間をとら

ずに「うわさ」を報告しても、その報告は価値のないものと直ちに認めていただければ、と思います。そうすれば、ボストンでも日本でも、不必要な心配はなくなっていくでしょう。「仕事では疲労するが、悩みではすり減る」ということは、故国だけでなく、日本でも全くその通りです。神様が認めてくださる微笑みを感じつつ忍耐強く仕事を続けているのに、空想にふける書き手の扇情的な1通で私たちのことが誤って伝えられ、こちらでの長い論議をまきおこし、場合によっては釈明の手紙が必要になるのです。しかし、この間も「神は歩み続けておられるのです。」

宣教師というのは、時には「偏狭だ」と思われていて、「自分たちの仕事しか頭にない」などと言われていると聞いたことがあります。実際には私たちの心は世界中の仕事を引き受けるほどに広いのに、仕事に入れば入るほど、神が私に与えられた土地を、よくても不完全にしか耕せないことがわかって、恥ずかしく心が痛む思いなのです。自分の目の前の仕事を正直に公平に記述する機会にもほとんど恵まれないのです。ましてや、空論にふけったり、隣人のかわりに書こうものなら、きっと失敗に終るでしょう。

目前に特定の任務のあるステーション［伝道拠点］の方々の意見にもっと信頼を置く方がよろしいのではないでしょうか。当地に集まっている際立った個性の持ち主たちが、素早く欠点に注目し、その場でそれを修正したり事実についてのまがりなりにも公正な記述をあなた様にお送りするはずですから。京都ステーションの全員が毎日私たちの仕事すべてをご覧になり是認しておられるという事実には、心からの深い満足があります。

いつものように木曜日の夜、生徒の家で行われる会に出席しました。大勢の人たちが家の中や周辺で注意深く耳を傾け、トラクト[6]や説教の場所を知らせる日程表を喜んで受取り、また来ることを約束しました。大勢の人たちが集まるデイヴィス先生のお宅には、毎週日曜日の午前と夜に行っています。外国人の家だから引きつけられるということでは、必ずしも長続きしない人もいます。でも、皆はデイヴィス家での永続的な良い働きは期待できると思っ

ています。このことについてはいずれもっと詳しい説明を受け取られることでしょう。デイヴィス先生のクラス、、、【頁脱落】

先生の建築計画の美点は、理論と実践が密接に結びついていることにあるように思えます。実践と教えが一致しているのです。先生はご自身がなさるのに気が進まないことは他の人たちにも要求なさいません。

できる限り日本の原則に基づいている女学校の建築計画を心からお認めいただけるものと信じています。私たちはその計画がとても気に入っています。

敬具

Ａ．Ｊ．スタークウエザー

1　高松仙（?-1892）丹波出身。1882年邦語科、1883年英語科卒。卒業後は女学校で助教を務めた。
2　山本峯(1862-1886?）山本覚馬・うら夫妻の娘。1871年、祖母山本佐久、叔母山本八重とともに上洛。1876年12月３日西京第二公会で新島襄より受洗。1881年、横井時雄（今治教会牧師）と結婚。
3　西京第二公会（新烏丸公会）。1876年12月３日に新島邸に設立され、新島襄が仮牧師となる。同志社教会の前身。
4　陶山たせ　夫の陶山昶（すやまとおる、1850-1898）はパームの新潟伝道の協力者。夫とともに一時、同志社に学んだ。
5　Theobald Adlian Palm（1848-1928）エディンバラ医療伝道会宣教師。1874年５月来日、新潟で伝道。
6　トラクト出版委員会から出された、世間に頒布するための宗教上の小冊子。デイヴィス著『真の道を知るの近路』、『いとぐち』などが市中でよく配られた。

〈243〉【小林弘美 訳】

京都から７マイル離れた比叡山にて、1878年７月26日、クラーク博士宛

拝啓

「栄光の７月４日」の独立記念日は、「京都ホーム」への引越しが完成することでお祝いすることができました。にもかかわらず、当日やそれまでの数日はやることがたくさんあったので、翌日まで、その事実にもそれがまさ

にふさわしかったことにも気付きませんでした。

パーミリーとウィルソンは夏の間、有馬に留まることになり、最後の諸々の管理すべてを私にゆだねましたので、怠慢な大工に注意を払い、暑い京都をできるだけ迅速に去って、比叡山のデイヴィス一家のキャンプに加わる用意をしました。

ラーネッド博士はミッションの年次大会を中途で引き揚げて、横浜で奥様と合流され、その後函館に向かわれました。そこでお二人はさわやかな空気と快適な休養を満喫しておられます。この夏、グールディ[1]と女生徒４名―わが校の３名は家が遠方なので、とても自宅へ戻れないのです―が入れるような大きなテントを調達してもらいました。グールディはグッドリッチ夫妻[2]と別れの挨拶をしようと待っています。というわけで、「梅雨」入りした後でしたが、私も出来るだけ早い時期に女生徒を連れて比叡山に来ました。

山上で、デイヴィス一家は11日間太陽を見なかったようでした。実際、京都の町ではいたるところカビだらけでしたので、比叡山の冷たい大気に触れ、蚊や蚤から解放されたことで、局面は一変し、山に避難してよかったと思いました。神戸からの便りでは、19日間雨がひっきりなしに降り、カビはかつてないほどだとのことです。しかし私たちは感謝こそすれ、不満は何もございません。私は主の修繕工場に入ったように感じています。毎日お祈りをし、秋からの主のご用のための備えをしています。体調を整えることはとても簡単です。なぜなら私の健康状態はすこぶる良好だからです。当地で年々以前にもまして丈夫で忍耐強くなってきているのがわかります。

あなた様の５月20日―ですね？―のミッションへの手紙で、「京都の女学校」の建物が同志社英学校に転用される可能性が示唆されているのを読んで、深い心の痛みを覚えました。そうなるとは少しも思いませんが、あの建物は本国の多くの女性たちの献身的な祈りと働きによって、女生徒への伝道のために厳粛に捧げられたのです。それを、パーミリーとウィルソンの許可証発行が遅れているという小さな不安材料で、その建物本来の目的がいとも簡単に

抜け落ちてしまうのかということに対しての痛みなのです。すでにお手元に届いている筈の報告書、その中では、この仕事がどれほど差し迫って必要であるかをお伝えしていますが、それが忘れ去られたか、ほとんど気に留めてはいただけなかったのかと思えるのです。でなければ、主が栄光と共に京都へ迎え入れた少女や女性のための救いを、いつまでも障害物に邪魔させたままにしておくなんてことを、あなた様が一瞬たりともお考えになるはずがないのです。

私たちは、日本の女性たちが真夜中の雲の下に長い間坐しているのを知っています。人知を超えた摂理が本国の多くの女性たちの心を奮い立たせて、主の前に跪いて資金を捧げさせられたことを知っています。それは、日本の女性たちの心を神様に向ける教育の場にふさわしい建物設立のための資金だったのです。２ヶ月前にお知らせしましたように、「地獄の支配では打ち勝つことのできない」力が、すでにここ日本では確立されていることを実感しています。

比叡山から京都の町をしばしば見下ろすのですが、外見上は大きな雲、どす黒い陰気な雲が、町を包み隠しているのが見えます。一方京都の友人は見上げて、ああ、比叡山がそんなに頻繁に雲の中にあるのは、何てかわいそうと言います。実際には、太陽はここ比叡山では明るく輝いています。多分京都でもそうでしょう。ただ霧と雲が単に私たちの間にあるだけなのです。それで、日本とボストンの間のこの避けられない霧を一掃する助けとなればと思い手紙を書きますが、とりわけ今のように、広く行き渡っている理論の持ち主である男性宣教師から手紙を受取られたときにも、よく状況を的確にご判断なさると不思議に思う次第です。というのは、こちらですらあの人たちの前例のない理論は、一日でその基準にまで達し得ない全ての尊い仕事の重要な部分を隠してしまう羽目になっていますから。

しかしこの霧、あるいは人の目には「太陽をすっかり覆い隠す」この「小銭（ペニー）」（とミッション会議で非常に思いやりを込めて、しかもうまく表現

されましたが）のことはさておき、私たちが足を踏ん張りそこに立脚できる現存の事実、真理、あるいは実現可能な仕事に目を向けましょう。主が私たちの足元にこれらの事実や堅固な支えをはっきりとわかるように置いてくださるので、その上にしっかりと立ちましょう。さあ、目の前にあるのは何ですか。事実？そうです。当地の何千人もの人々に周知の事実となっているのは、「神の学校」、つまり「京都の女学校」なのです。英学校から半マイルも離れていないところに建っていて、その回覧状は英学校のものと一緒に１つに綴じられています。しかし、日本人はその英学校あるいは「イエスの学校」という名前よりも立派な「神の学校」[3]という名前を自ら進んでつけたのです。この土地で束縛された状態から女性を救い出すという神様の特別の恩寵と決意を認知して、神という名前は不滅のもの、不変のものを表すという思いからなのです。この神聖なるもの［女学校］が少数者の心の中でおもちゃのように放り投げられ、そのような形であなた様に伝えられるのを見て心が痛みます。実在する貴重な積荷［女学校の内実］をすっかり無視しているからです。確かに、女学校のことが喜びにならないように精一杯邪魔をした人も少数いました。でも今だったらそれをしようとしても無駄でしょうね。実際に主はその人たちを挫折させてしまわれたのです。それでも今だに、本当に限られた人のみしか学校に行かせないと、女学校の発展を妨げようとするのです。

あなた様の手紙の集散地近く、ボストンから何百もの人々が「ウェルズリー大学[4]学生支援団体主催の盛大な祝典の喜びに加わるため」出かけていかれました。あとのことはご存知でしょう。でも、その少し後で、祝典の「大きく自由で広い目的」に隠れて最大限の力を使って、私たちの学校が外国からの資金援助を受けるという考えを永久に締め出し、同時に、授業料を値上げしようとした人がいることを、どんな風にお伝えしたらいいでしょうか。

キリスト教は何世紀もの間、まやかしの宗教―その根底には、ここ日本での女性の地位の低さがありますが―と同じほどの支配力はありませんでした

が、「私たちの恵まれた土地」で順調に広がってきました。そして確かに、何かの「支援団体」への興味を呼び覚まそうとするには、資金は絶対に必要なのです。でも、ある宣教師の最大の才能は、些細なお金を調達すること、すなわち「小銭」を同胞たちの前に示すことに極力向けられているので、異教徒自らが支援団体を立ち上げていない間は、主への忠誠心を示すことや女性を早く救済することを忘れて、女性に対して門戸を固く閉ざし、外国からの援助金を受け取ることを拒むのです。

今は、私の所属するニューイングランド、中西部、そして太平洋岸[5]の偉大な女性たちの胸が長年に亘って、高鳴っているのを感じることができます。そして、日本の女性のために救いと自由をという同じ精神を築くのにお役に立つようにと、皆様が私を喜んで送り出して下さった時と変わりません。数え切れない手紙は、皆様の胸の高鳴りが少しも弱まっていないことを示してくれる証しです。本国の女性たちのお祈りや労働の力が、心の奥に骨身にしみて感じられます。抵抗をこの地の暗い異教崇拝の厚い雲とみましたが、実際、私たちの最も手ごわい障害は何でしょう。ここ日本の異教崇拝ですか。いや、そうではありません。というのはよくご存知のように、大きな町では、幅広い教養を身につけさせる女学校の設立に際し、かなり前から政府が強く関与する風潮があるからです。日本人は実に様々なことを知っています。もちろんそこにはキリスト教の要素はありませんが。世界の国々に存在が認められるには、女性たちの地位を向上しなければならないのに、そのような西洋の考えについては何も知らず、悲しいことに日本人は暗闇の中を手探りで進んでいます。そんな時正しく仲間の宣教師の中に最大の障害が潜んでいると気づいたときの皆の困惑を想像してみてください。少数の人ではありますが、異教の考えの名残をみすぼらしい荷物のどこかに取り込んだり、しまっておいたりした人がまだいたのです。本国ではそういう考えはとっくに岩の深い裂け目に入れられ、燃え尽くされたものと私は思っていましたのに。だから新人の宣教師が日本人に「アメリカでも完全なクリスチャンと言える人

は少なく、キリスト教化された部分はその人のせいぜい５分の１くらいですよ」と言うのは当然です。日本人がそれを聞いて、信仰の躓きになっているこの状況を少しは理解できるかもしれませんから。昨日起こった次の出来事は、そのことを明らかにするかもしれません。それでも、今は牧師になっている改宗した異教徒の青年の苦悩と困惑の10分の１も表すことはできないでしょう。

その青年は小さな子供のように少しも疑わないでイエスの福音に聞き入り、主が言われることに疑問を持ちませんでした。異教崇拝から抜け出し、神様が女性に備えられた価値の深い意味を理解し、自分の国でその水準が速やかに上げられるのを見たいと願っています。私たちがここ日本の低い水準や早婚について聞かざるを得ないとき、青年は深い恥辱感を覚えると、涙ながらに私に語ってくれました。この人は数年前、11～12歳の幼い少女と婚約したのです。キリスト教徒になって以来、許婚が教育を受けることに同意してくれるようにと祈り、両親に願い出た話をお聞きになったら、きっと同情なさり、涙を流されることでしょう。将来の仕事の計画について兄弟と相談した後のことですが、この青年が言うには、「某［宣教師］夫人から『いつお菊さん[6]と結婚するの』と聞かれたのです。『菊は卒業まで学校にいます。３、４年かかるでしょう』と言うと、夫人は驚いて『それまで待つの？』と尋ねました。『ええ、勿論です』と答えると、『まあ、とても我慢強いのね』と言われました」とのことです。「とても不思議な質問でした」と青年は付け加えました。

このお菊さんは、１年前本学へ来たときはわずか14歳でしたが、すぐに初めて聞いた主に対する素晴らしい信仰を深めました。極めて愛らしく、家庭において有能で、あらゆることが得意で裁縫に長けた女の子ですが、そのようなことは実は大したことではないのです。まだ魂が育っておらず、自分に魂があるという自覚すらないのですが、そのような年頃の、そのような教育しか受けてこなかった少女を想像なされば、幾分はお菊さんのことを分かっ

てくださるでしょう。今、真の信仰を持ったお菊さんはいろんなことを手伝ってくれ、町の中心の教会で讃美歌集にあるほとんどの讃美歌を気持ちよく歌い、オルガンを弾いてくれます。

問題の宣教師の言葉で、お菊さんのような若い女性たちが、こんなに頑張っているのに学校が廃校になるのかと悩んだり、人々の才能がすり減らされることになるなんて、書くのはもちろん、考えるだけでも私には苦痛で、お話しづらいです。

ここ日本で、早婚という名誉ある身分に入る前にしばらく通う少女のための裁縫学校として特に著名な「大阪の学校」[7]の目的が何であれ、「京都の学校」は信仰と知識を持つ強い女性になるよう少女を教育する学校として、広範囲にわたって必要とされているのです。あの弁説会の日に「神の学校」を指し示して「聖書に詳しい[8]！」と雄弁にも語った人以上に上手く表すことができません。私たちは、いつも聖書を大事にし実際の家庭的な仕事もできる女性の高等教育を推し進めるつもりです。これは実行するのは簡単です。ただし、啓発された日本人の影響力に委ねられるならば、ですが。それはつまり、キャプテン・ジェーンズの教育と現在の教師陣の幅広いキリスト教の教えを共有する人の間に行き渡っている力のことです。この人たちは、自分の姉妹や友人、そしてあちこちの町の伝道の果実［女性たち］を連れてくることを楽しみにしています。

「昔学校があった大阪に行きなさい。男性中心の考えを優先したので、女性たちが通りに見捨てられてしまったことを、つい最近知りましたが」と言うよりも、「京都に私たちと一緒にいらっしゃい」「ここに私たちの学校のことについて書かれている回覧状があります」のほうが、ずっと言いやすいのです。わが校の女生徒たちが１つの考えを持った人々に無視されるだけでなく、大阪の女性宣教師の存在と働きが全く無視されているのです。彼女たちの教会での働きを通して明らかになっている成果もです。それだけで満足せず、その同じ力［男性中心の考え］は、女生徒に影響を与えるためにもたら

された、もっとも非凡で細やかな心遣いをするキリスト教の感化力［外国人女性宣教師たち］が、豊かな信仰、言い換えると、真のクリスチャン女性の基準を純粋な目で見抜く力を、神戸の多くの女生徒たちに伝えることを大胆にも無視しようとするのです。そのような信仰や力は、１年間勉強した後でクリスチャンになる異教徒の女性から得られるよりも、女性宣教師からのほうが、ずっと優れたものが得られるのに、です。生れてから愛する母国を去るときまで、母を始め、様々な女性の影響力が、アメリカでの私自身の生活の中でいかに重要だったか、神様だけがご存知です。そして母の心を持った私たちは今日、「出かけて行って、あの異教の少女たちに母のように接しなさい」という、本国の母親たちの結束したキリスト教徒の心の大きな願いの叫び声を聞くのです。お蔭さまで、私たちはそれを行なっています。そして異教の少女たちが私たちのところへやって来て打ち明け話をしたり、聖霊によってこの国の未来を飾る美しい女性になっていくのを見るとき、私たちの仕事は喜びであり天の恵みなのです。

日本においては女性対象の仕事が唯一の仕事というわけではありません。しかし、たとえミッション全体の中ではほんの一部分にすぎないとしても、京都ホームでの仕事は、ありがたいことに、非常に重要なものになっているのです。少女や女性が暗い部屋に閉じ込められている時代は去り、みんな外に出始めています。異教徒はそれを求めているのです。この馬車の車輪の前に障害物を差し出す人はやがて、自分の娘たちが父親を恥じるのを見ることになるのです。ミッションの全地域で、かつてないようなやり方で設立された私たちの学校、つまり今は私たちの卑しい手から主の御手に完全に委ねられている「京都の女学校」のことを考える機会が与えられるときには必ず、まことにすばらしい事実として女学校のことを覚えてお話しください。不運にもある朝、通りに投げ出されるという心配がないように、神様が多くの頼りとなる防御物を備えてくださっているのです。写真をお送りしたいと思っていましたが、ここ比叡山に来る前にお送りすることができませんでした。

これからは、折々、きちんとお知らせをするように努力いたします。わが校は現在20名[9]の生徒に制限され、だれをも補助する努力をしていないので、当然多くの空席があります。最も栄えている学校では、ほとんどが授業料免除の生徒です。そのような学校では授業料返還を要求されることなく、学費免除の生徒たちは校舎の掃除などを手伝います。そこは多くの優遇措置があるので、過去４年の変化[10]でほとんど全てを失った最も知的な階級の人々が多くやって来るのです。５年の間には、知的階級の人々は幾分は元に戻り、事業を成功させているかもわかりません。今、ある程度援助されるなら、５年目が終った時分にその人たちは多くの明りをこの国中に灯す力となることでしょう。

一人の青年が最近私たちを訪ねて来ました。この人はミルや[11]スペンサー[12]の不信心な書物を多く読んでいましたが、通っていた東京の開成学校の先生から、先ずこれらを読んで勉強するように、その後で望むのなら、聖書自体を研究すればいいと教えられていたそうです。この不信心は全ての教育の中心地から広まっているのです…。

敬具

アリス・Ｊ・スタークウェザー

1　Mary Elizabeth Gouldy（1843-1925）1873年に来日した女性宣教師。1879年、梅花女学校に着任。

2　1875年来日の、大阪ステーション女性宣教師フィーラー（Justina Emily Wheeler, ?-1878）は、1878年５月31日、北中国ミッションの宣教師グッドリッチ（C. Goodrich）と結婚。中国へ旅立ったが、間もなく病没。

3　ここでは、同志社英学校を「イエスの学校」、同志社女学校を「神の学校」と呼んで、両者をはっきりと区別し、しかもその名称は日本人がつけたのだということをクラークに伝えるスタークウェザーの記述が興味深い。宣教師は英学校をトレーニング・スクール（伝道者養成学校）と呼んでいたので、それをイエスの伝道活動になぞらえる一方で、女学校創立は予期しなかったアメリカでの募金活動によって出来た、まさに神意によって建った学校としか言いようがないという思

いを「神の学校」という名称に託したと思われる。

4　Wellesley College デュラント（Henry Fowle Durant, 1822-1881）夫妻によって設立された、リベラル・アーツ教育を標榜する女子大学。1870年、女子セミナリーとして認可、1875年開校。勉学意欲はあるが経済的に困窮している学生を援助する目的で、学生支援団体が1878年に組織された。

5　ウーマンズ・ボード（東部、中部、太平洋）の所在地域を指す。

6　高畠（西村）菊　1884年邦語科卒業。東京養育院に勤務。高畠登代作と結婚。

7　1878年に開校した女学校。梅本町公会と浪花公会、両教会の名を合わせて、梅花女学校と名付けられた。創立当初から自給学校として外国ミッションから経済的援助を受けず、教会によって支えられ、運営された。

8　新約聖書「使徒言行録」18：24。

9　京都ホームの校舎建築委員会では、当初は生徒数は20名を限度とし、その内、寄宿生は14名を超えないという条件がつけられた。

10　1873～1881年に明治政府が財政的基礎確立のため地租改正条例に基いて施行した土地制度、租税制度の改革。

11　John Stuart Mill（1806-1873）イギリスの思想家・経済学者。実証的社会科学の理論を基礎づけ、功利主義の社会倫理説を説く。

12　Herbert Spencer（1820-1903）イギリスの哲学者・社会科学者。哲学と科学と宗教を融合しようとした。

〈76〉【紀和敬子 訳】

日本の京都にて、1878年８月２日、【宛名なし】

拝啓

最近の新聞が今届いたところです。新島氏が、現在マサチューセッツ州スプリングフィールドで勉学中の若い大名、岡部さん[1]の郷里を訪問している記事が載っています。そのことは１週間前にご本人の口から聞きました。岡部さん自身は、ムーディ氏[2]がスプリングフィールドに滞在していた昨冬に主に出会い、日本やアメリカでも日本人をキリスト教に導くために大変尽力されました。この人は、郷里の人だけでなく新島氏にも手紙を書き、当地で教えるのに新島氏に行っていただくか、無理ならば誰かを送っていただきたいと依頼しました。それで新島氏ご自身が行かれたのです。大勢の学生、近

隣の人々、富裕な家来たちがどんどん集まってきたということは、太平洋両岸のクリスチャンたちと同様に、この若い大名にも満足なことであるに違いありません。最初は地位や学識のある男性だけが来ました。しかし新島氏がこの宗教は男性だけでなく女性のためのものでもあると教えたので、女性のための集会が２回開かれ、それぞれ100名を超える女性が出席する結果となったのです。女性たちに、神様は心をご覧になるのであって、顔や立派な衣装を重視なさるのではないと教えるには、失礼にならないような配慮が必要だったことでしょう。グールディは、秋に新島夫人と共に岸和田に行き、仕事をしたいと願っています。新島氏の仕事を引き続き行なっている山崎［為徳］氏からの最近の手紙には、１週間に４回の集会、いつも40〜50名の聴衆がいると書いてあります。この中の１つが、女性のための集会なのです。聴衆の中には学生も多く、京都の英学校に来ると誓っている人もいます。娘を私たちの学校に入学させて、出来るだけ早くクリスチャンの影響下に置いてほしいと望んでいる父親もいます。海老名氏[3]（グールディの日本語の先生）は、安中（新島氏の故郷）で５ヶ月間、輝かしい仕事に従事しています。８人の女性がその地で新島氏が組織した教会[4]に加わりました。

敬具

アリス・Ｊ・スタークウェザー

1　岡部長職（1855-1925）岸和田藩主。1875年米国留学。1878年、マサチューセッツ州スプリングフィールドで受洗。

2　Dwight Lyman Moody（1837-1899）マサチューセッツ州スプリングフィールド生まれの伝道者。1856年、キリスト教に入信。1870年以降、アメリカやイギリスの各地を巡回して伝道。

3　海老名弾正（1856-1937）熊本バンドの一人。1879年英学校を卒業し、牧師職を歴任。1920〜28年、同志社総長。

4　安中公会。1878年３月31日、新島より湯浅治郎他30名の地元の求道者が洗礼を受け、教会が設立、海老名弾正が仮牧師に任命された。